

【史料】女郵便局長アン・ラヴェンダー の思い出語り

——19世紀後半のレスターシャーで起きた奇譚二篇——

水 田 大 紀

史料解題

本稿は、ロンドンの The Postal Museum 内の記録保管室 (Discovery Room, 旧 Royal Mail Archive) 所蔵の『セント・マーティンズ・ルグラン』誌 (*The St. Martin's Le Grand*) に掲載された、投稿記事二篇の全訳である。記事はどちらもクラーク (T. S. Clarke) という人物により執筆されており、原題はそれぞれ、'Recollections of Ann Lavender, Postmistress' (vol. 2, July 1892, pp. 190-195), 'Further Recollections of Ann Lavender' (vol. 3, January 1893, pp. 23-28) となっている。

『セント・マーティンズ・ルグラン』誌は、通信省官吏の手による非公式の同人誌 (Staff Magazine) である。継続前誌の『ブラックフライアーズ』誌 (*The Blackfrairs: the Post Office Magazine*) の廃刊を受け、1890年より公刊されると、1933年の廃刊までに全43巻が出版された。雑誌の形態は季刊 (1, 4, 7, 10月出版) で、版元にはロンドンの印刷会社 (W. P. Griffith & Sons Ltd.) があたった。編集者は通信省貯蓄課 (Savings Bank Department, General Post Office) に二等官 (Second Division Clerks) として勤務するエドワード・ベネット (Edward Bennett) が務め、会計役としてシャーウィン・エンゴール (Sherwin Engall) と A・F・キング (A. F. King) の二名、賛助者には同省次官執務室 (Secretary's Office) の一級官 (First Class Clerk) F・J・ベックリー (F. J. Beckley) と、三級官 (Third Class Clerk) A・M・J・オーグルヴィー (A. M. J. Ogilvie) が名を連ねていた。価格は年間3シリング (国際・国内郵送費込) の前払いで、同誌の収入はこの会費に加え、広告料で賄われていた。また卸売形式の販売方法をとっていたが、読者からの希望があれば直送も可能であった。また読者には編集者より、記事の投稿だけでなく、通信省や郵便局に関連した情報の送付が呼びかけられた。また『セント・マーティンズ・ルグラン』誌の廃刊後には、後継誌として『ポスト・オフィス・マガジン』誌 (*The Post Office Magazine*)、続いて『クーリア』誌 (*The Courier*) が発刊された。

前誌にあたる『ブラックフライアーズ』誌も非公式の同人誌で、1885年より全9巻が公刊され、1889年の12月号をもって廃刊となった。出版はシェパード&セント・ジョン社（Sheppard and St. John）が担い、ロンドンのクィーンヴィクトリア街に設置した事務所で、J・J・カーテン（J. J. Curtayne）、F・W・ポーター（F. W. Porter）、E・A・フランシス（E. A. Francis）の三名が同誌の編集にあたった。発行人名はC・W・アルトゥング（C. W. Hartung）となっている。出版形態は月刊で、おおよそ半年分で1巻が構成された。価格は半年（6か月＝1巻分）で3シリングであった。

さて、本稿の語り部についても説明しておく必要がある。以下の情報は本文を読み進める際、その理解の助けとなるであろう。1871年の国勢調査によれば、アン・ラヴェンダー（Ann Lavender）は1808年にアイルランドで誕生した。いつイングランドに渡ったのかは定かではない。ウェールズと隣接したイングランド西部の州シュロップシャーのウェリントン出身で、1809年に生まれたジョン・ラヴェンダー（John Lavender）と結婚し、イングランド中部にあるレスターシャー東部のウェスタービーで長らく生活を営んだ。1871年の調査時点では、二人暮らしと書類には記載されている。ラヴェンダー夫妻は子供には恵まれなかったが、本稿前半にあるように、両方の親族から一名ずつ養子を得ていた。文中にもあるように、夫のジョンは蹄鉄工や大工、旋盤工などを引き受ける、村の何でも屋であつたらしい。アンの職については、1871年の調査では空欄となっている。なお、1881年、1891年の国勢調査には、彼女についての記述は登場しない。

アンの主張によれば、彼女は結婚後5年ほどしてから郵便局長の職を得た。しかしその一方で、通信省の管轄下にある郵便局の職員について記録した年次の『通信省職員録』（*List of Officers of the General Post Office*）に彼女の名前は記されていない。記録保管室のアーキビストによれば、これは彼女の職が、地方の郵便事情を反映して設置された、かつての日本でいうところの簡易郵便局や特定郵便局のそれに近く、普通郵便局の職ではなかったからではないかとのことであつた。彼女が勤めた下ウェスタービー郵便局には、従業員は彼女しかおらず、自宅に隣接した店舗で営業が行われていたことも、上記の解釈の証明になるだろう。

また彼女の俸給は年に125ポンドであつたが、これは当時の通信省貯蓄課の女性一級官の年俸の上限、もしくは同課の男性二等官の下限とほぼ同額であつた。1890年代に通信省貯蓄課に勤務した女性の二級官324名は、年俸65-100ポンドを得ていた。イングランド銀行でも女性行員の給金は54-100ポンド程度であつたが、一般的な女性事務員の年俸は大体50-60ポンドであつた。当時の基準からいえば、年40ポンドでは、自活はできても中産階級女性としての身だしなみ、体面などを整えることはできなかったとされる。そのため、働く女性たちは年100-150ポンドの収入を期待したが、これはロンドンで最もよい俸給を得ていた女性の年俸とほぼ同じであり、ほとんどの女性がそれに到達することはなかった。その意味でアンの俸給は、文中では「たった」と表現されているものの、当時の労働者ないしは下層中産階級の女性の収入と

しては十分なものであったといえる。

執筆者のクラークについても簡単に触れておく。本稿後半の「はしがき」からみるに、彼の職は地方の小郵便局の業務監査を行う、巡回郵便局検査官 (Surveyor of Travelling Post Offices)、もしくは地方検査官 (Provincial Surveyors) であったのではないかと考えられる。彼はその立場と時間を利用して、地方の郵便事情にまつわる四方山話を蒐集しては、『セント・マーティンズ・ルグラン』誌に投稿していたようである。1892年に限っても本稿の記事以外に、彼は「配達夫詩人のジョン・ハイスロップ」(‘John Hyslop, the Postman Poet’, vol. 2, July 1892, pp. 221-224) と「田舎の老郵便配達夫、最後の仕事」(‘The Old Rural Postman’s Last Delivery’, vol. 2, January 1892, pp. 1-5) を投稿している。ただし彼の名も、記事が投稿された1892-93年前後の『通信省職員録』にはみつからない。そのため、クラークの名がペンネームである可能性も残されている。もしくは、彼の職もアンと同じく、通信省の直轄業務ではない、各地域で任命された類のものだったのかもしれない。

最後に、本稿の史料としての意義について。イギリスの最盛期にあたるヴィクトリア時代をほぼ生き抜いたアン・ラヴェンダーは、工業化の進展を目の当たりにしつつ、彼女の経験を当時の記憶伝達のパターンに従って現在に残すことに成功した。彼女による口述の思い出語りは、19世紀イギリスの地方社会に生きた、歴史的には全く無名の人物を題材に、当時のイギリス人女性の家族観や郵便事業に関する認識について考察するうえで、極めて貴重な証言なのである。この意味で今回の翻訳が、今後のイギリス近代民衆史研究の進展に、何らかの貢献として繋がっていけば幸いである。なお、本文の [] 内は訳者による補足である。

「女郵便局長アン・ラヴェンダーの回想」

私が郵便のお仕事に職を得た経緯は以下のようなものでした。結婚からおおよそ5年が過ぎた頃でしょうか、大工や旋盤工を職としていた夫のジョン・ラヴェンダーは、新型の蒸気機関の発明にかなり躍起になっておりました。それが、彼が一財産を築くための方法だったのです。夫はとても賢い人で、もう少しで上手くいくところだったのですが、結果は少々しくはありませんでした。もしここで彼が成功していたなら、当然のことながら私は女郵便局長にはなっていなかったでしょうし、今、あなた様にこの話をするようなこともなかったでしょう。成功できなかったにも関わらず、夫は発明に時間とお金の全てを費やしたうえ、相応の職分や貧しい同業者を軽んじ、ついには私どもが食べる物や着る物を買うお金のために、どこをひっくり返せばいいかわからないまでとなりました。ちょうどその頃、ご高齢の女郵便局長だったコーツさんがお亡くなりになりまして、郵便局検査官の方が他に職務を任せると人材を求めて、この田舎に下って参られました。とりわけ、その方はジョンに話をなさいました。「申し訳ございませんが、その職務のお引き受けはいたしかねます。が、なぜ私の妻を面談されようとはなさ

らないので？彼女は一級品の女郵便局長になれると思います。」このようにジョンは申しました。それで、検査官の方が参られまして、私に面談をし、種々の質問をなさいまして、最終的に私をその職に推薦することをお決めになりました。それがかれこれ40年前の事でございますが、まだ当地で同職を務めております。相変わらず元気で、ありがたいことでございます。

お給金はたった125ポンドでしたが、私どもはそれが得られることを心から喜んでおりました。なぜなら、私どもには子供はございませんでしたが、二人の養子をもっていただからでございます。ひとは夫の兄弟の娘でユーラリー・ラヴェンダー、もうひとはテッド・ゲールと申しまして、私の亡くなった姉妹の一人息子で、仮にそうだったにせよ、気まぐれな少年でございました。私は二人を愛しておりましたし、愛さずにはおられませんでした。それは二人がとても驚くほどに幸せな子供たちであったからです。二人は一緒に転げまわって遊び、喧嘩し、ふざけ合い、食事を楽しみました。ああ、私には臉の裏に二人を思い描くことができます。あらゆる種類の天使みたいな年齢の時分、小さな麦藁帽子を被って大暴れしている二人、じゃれつきたいと思っているときにする子犬みたいな笑顔の二人…。幾度も、スパニエル種の犬たちがいろいろな悪戯をしようとして、舌を出して目を煌かせながらハッハッと歯をむいている様子はきつとよくご存じのことでしょう。そう、あの子たちがいつも私に思い出させるのはそういうことでした。二人に挟まれて、彼らは私の人生の心配事であり喜びでもありました。二人が大人になったとき、私たちが二人にいったい何をしてあげるべきか、私はいつも考え、思い悩んでおりましたが、もし私が他の事よりもずっと楽しみにしていたことがあるとしたら、それははるか遠くの未来に、結婚した二人をみることでした。

およそ15年の間、私は手紙に切手を貼り、定式書類の空欄を埋め、現金勘定書を書き出すといった、自身の仕事をやり続けました。郵便局の仕事にはどこかとても楽しいところがあるのです。それは本当に穏やかで規則的でしたし、給金はもちろん確かでした。この15年というものの、結婚という考えは私の心の中で徐々に膨らんでいき、一種の熱狂となるまでにいったのでございました。子供たちが成長する頃までには、二人はこれまで私がみてきたなかで全くお似合いの男女になっていったのです。しかし二人は、あるべきように結婚する気はなかったようでございます。このことは私の不満の種となりまして、いってみれば、ますます気をもむこととなり、ついには最早堪えきれぬと、私が望んでいることをそれとなくほのめかし始めるまでとなりました。しかしそれは、私の意図とは真逆の結果を生むこととなったのです。当初、二人はお互いに対して気恥ずかしいようでした。そのあとになると、テッドは不機嫌な顔をするようになり、二人は諍いを起こすようになりました。そして一生忘れない、そう亡くなる日まで忘れられないだろう場面に、それは至ったのです。ユーラリーは泣き叫び、テッドは私に、彼の養母である私に絶対にいうべきではない言葉を吐きました。彼は激怒しており、私を「お節介な縁組ババア」と罵り、これ以上この家にはいたくないといい、しかも彼はそれを実行したのでした。それから二、三日後、彼は誰にも別れを告げず姿を消しましたが、次に私どもが

その消息を聞いたのは、彼が海に出て船乗りになったことを告げる手紙でした。

その後、およそ二年にわたり、彼についてそれ以上の知らせはありませんでした。その間、あまりにも軽率に話したことを、私は何度も何度も繰り返し痛切に後悔いたしました。それは私がテッドをまるで血を分けた自身の息子のように愛していて、彼を失ったことに、もしくは私が彼を失ったと考えることに耐えられなかったからでございます。にも関わらず、私はなお私が悪いことをしたとは思えませんでした。二人はそれはそれはお似合いの男女のように思えましたから。なんで二人は結婚しなかったのだろう？それにもしそうなら、なんで私は二人にお似合いだといわなかったのだろう？しかしながら、月日が過ぎるにつれ、テッドの名前は以前よりも話に出なくなっていきました。ところが、今も思い出すのですが、ある日ジョンがテッドについて、そして彼が戻ってくる可能性について突然話し始めたとき、ユーラリー（私が彼女のほうをみたと思ったようです）が一瞬にして髪の付け根までを痛ましいほど紅潮させ、追ってシーツのように青白くなったけれど、何もいわないでいることに私は気が付きました。もちろん私なりの心当てで、やっぱり結局は万事うまく収まるかもしれないなどと考えました。けれど私は決心しておりました。何が起ころうとも、もう絶対に二人の間に余計なことはしないのだと。

とある日曜の午後、たしか聖ミカエル祭の前日でしたが、ジョンが彼らしい穏やかな笑い方（彼は太っちゃで、体がブルブルするまで笑っていても、笑い声は決して立てないのです）をしながら店の方からやってきて、店の入り口で切手を売って欲しいと待っている人がいるよと声をかけてくれた時、私は切手用の請求書を書き上げてしまおうと台所の椅子に腰かけておりました。いわれてすぐに私が店に入ると、そこに白いあごひげと明るい瞳を持ち、船乗り服と全体的にボロになった外套を着こんだ老人の姿がみえました。彼をみた瞬間、強風のせいでボタンと閉じる玄関のドアのように、あまりの衝撃に私は肝を潰しそうになりました。なぜなら、彼と目が合うや否や、私にはそれが年老いた男性のように変装したテッドだと分かったからです。では、そのような仮装の意味は何なのでしょう。幸いにも私は眼鏡をかけておりましたので、私が彼だとわかったことを彼に気取られぬよう、最善を尽くしました。彼は私と同じくらい動揺しておりましたが、どうにか数枚の切手を注文し、私がお釣りを渡そうとすると、少々不自然な声で、ここいらの出でゲールという名の若い船乗りがいなかったかと尋ねました。

私は自分がそこに立って、彼と話をしていることが信じられませんでした。そこで私は彼に座ってちょっと待つようにいい、ジョンを探しに台所に参りました。間違いなく、ジョンは生まれながらの役者でした。私が彼をみつけたとき、ジョンはちょうどトビー叔父印のタバコ壺から長めの陶製パイプのひとつにタバコを詰めているところでした。私は彼に店に行ってテッドと話してくれるようお願いしましたが、あれが誰なのかをあなたが知っているかどうか、まだ確信を持っていないのだとも申しました。彼にはこれは好都合でした。なぜなら、その状況はまさに彼を面白がらせる類のことだったからでございます。先ほども申しましたように、よ

くジョンはさながら生まれつきの役者のように振る舞い、私はそんな彼をみるためにその場に居続けたいと、しばしば思わされます。しかし私は、すぐに店に戻ることを思いつけませんでしたし、そのうえ私にはほかにすべきことがあったのです。最初に私はユーラリー（彼女はいろいろな点でおじのジョンにとっても似ているのです）を呼び、もう一人「テッド」のために彼女を店の中に行かせました。もちろん私にはわかっておりました。何がわかったのかと申しますと、ユーラリーはすぐにテッドだと悟ったでしょうが、自尊心があることはいうまでもございませんので、私以上に彼女が自制心を働かせたことを、でございます。ユーラリーに声をかけた後、私は考えをまとめるため、30秒ほどの間、台所に座り込んでしまいました。と申しますのは、自分が頭で立っているのか、それとも足で立っているのか、本当に分からなくなってしまうほど、全てのことが変なふうに感じられたからでございます。

涙を拭いながらそこに座っていましたら、ミカエル祭用のガチョウ、それは明日の夕食用に既に串刺しにしておいたものでございしますが、それが戸棚に置いてあることを思い出しました。たまたま台所では結構な火を起こしてありましたので、私は平鍋をおろし、かまどにガチョウを入れ、薪をくべました。そして私はマデイラワイン「マデイラ島産の酒精の強いワイン」の古瓶を取り出しに参りました。そのワインは、どれほどの年月のものなのか、私には見当がつかないほどずっと、階段下の押入れにおいてあったものでございしました。マデイラワインを探しておりますと、布地に包んでフックに吊るしておいた、クリスマス前に作ったプラムプディング「クリスマスプディングとも。小麦粉に刻んだドライフルーツ、ナッツ、砂糖、ブランデーなどを混ぜて、型に入れて蒸し焼きにした菓子」の残りをみつけました。それを下しまして、お湯が沸きかけたシチュー鍋がございしましたので、私はみつけたプラムプディングをその中にポンといれしました。私は垣根越しにお隣から乳脂を貸してもらおう、その乳脂とうちの鶏の生みたて卵でカスタードを作ろうと思っておりました。だって、放蕩息子たちは週7日、家に戻ってくるわけではないのですもの。なので、私は「ああ神様、どうか今晚、私たちが我が家ではめったにお目にかかれないような晚餐をいただけますように」と心に固く思いました。次は食卓を整える番です。私は戸棚の上の引き出しから、我が家で一番上等なりネン布を取り出しました。それを敷いて、私の結婚祝いに母がくれました銀のフォークも並べました。食卓を完璧に整え終わり、全てが素晴らしい状態になる頃になっても（準備には長い時間がかかりました。なぜなら子どもたちについていろいろ考えたことをほとんど何も思い出せないのです）、私には自分がテッドのところに行って、彼と冷静に話ができるまでに回復したとは、到底思えませんでした。そこで上の階にあがり、一張羅の絹のガウンを身につけました。これは正真正銘、モアレ「波紋織」の入った年代もので、長年持ってはおりましたが、たった4度しか着たことがないのでございしました。私が思っておりましたのは、その日は特別な日で、かつての実家に彼がどれほど歓迎されているかをテッドに示すために、どうにかして私ができる全てをしようとしているということだったのでございます。

持ち物の中で最上の帽子を被り、涙も乾いて、やれることが全くなかった頃、ようやく私は店に戻りました。すると、まだ不思議な状態が続いているのが、私の目に飛び込んでまいりました。ユーラリーは電信機の傍に立ったままで、ジョンは売り台に身を乗り出し、テッドは光を背に高めの丸椅子に座って、相変わらず不自然な声でしゃべっておりました。ジョンは私が上等なドレスを着ているのをみつけ、それを眺めるために、私が立っていた扉の方にやってまいりました。その状況を楽しむかのように、彼はウィンクをいたしました。

「さて、アン」と彼は申します。「ようやくあのテッドの奴の消息がわかったよ。この紳士は奴に会ったそうだが、奴が今どこにいて、いつ家に帰りたいと思っているかは知らないそうだ」。

「彼が幸福でいることを祈るわ」と私は申しました。

「僕もだよ」とジョンはいうと、「でもそれを疑わしいとも思うんだ。なぜって、この紳士がいうには、船乗りたちはそういう厳しい生活を送っているようだからね」と続けました。

「送っとるんですわ、旦那」とテッド。「そうして、奴らは大抵、故郷のことや、自分がいつそれをもう一度みることができるかを考えとるんです」。

「でも」とユーラリーが申します。「なかには喜んで家にいない方もいらっしゃるんじゃないかしら。彼らには彼らの喜びがあるの。彼らは皆、陽気な一団だって、いつも聞いていますもの。故郷の心配なんてしないわ」。

「どこかで読んだんだがね」と、ジョンが彼らしい結構なやり方で返します。「陸に上がった船乗りは、もう一度海に出るまでは決して落ち着けないそうだ。それは人生を海に委ねるといふ覚悟の現れじゃあないのかね？」。

「それはその人たちが私に家にいてほしいかどうか次第じゃないかしら」。しばし誰もしゃべりませんでした。そのうちテッドが目に諦めきれなさを浮かべながら再び話し始めました。

「いわせてもらえりゃ、大半のおうちなら、その人らは船乗り少年たちが戻ってくるのを熱望しとるんじゃないかねえ。時にゃその船乗りの若者が故郷にまた戻ってくるのに備えて、ハムを塩漬けにして、燻蒸するために煙突にそれを釣っておいとくこともありまっさ。あんた方が話しとる若者の、息子のゲールさんだかがそれでさあね」。

テッドが話すのをやめると、私たち皆が期待した面持ちでユーラリーの方をうかがいました。彼女の顔色は真っ白で、容易ならぬ表情をしておりました。

「まあ」と彼女はいうと、「彼は私たちと別れてとっても嬉しかったんだし、それ以来、一言もないわ。私たちが帰宅を待ち焦がれてるなんて、彼は望むべくもないのよ」と、はっきりと申しました。

彼女の言葉はテッドにはきつかったようで、それを聞いて彼は、悲しそうに傷ついた顔をいたしました。

「そうなんですかな」と彼は申しました。「申し訳ないが、あんたは彼を誤解しとられるの

かしれん。しかし、もうお引き留めするのはやめやしょう。わしも行かにならん」。

そういって、彼はとてもゆっくりと椅子から降りました。その姿は、まるで自分の望みに反して動こうとしているかのようで、また永の別れをする前に故郷に別れを告げる男性のように、彼は周りを見回しておりました。それから彼は帽子を被り、顔を手で擦ると、振り返ってドアに向かいました。自分が全く辛抱できなくなったのか、それとも神経がおかしくなってしまったのか、私にはわかりません。ただ私が感じたのは、話さなければならない、さもないと息が詰まってしまうだろうということでございました。ですから、私は店に飛び込み、声をあげました。「テッド！」。

彼が振り返りました。

「テッド！」私は続けます。「だって皆、あなたが誰かわかっているし、最初からわかってたのよ。この長い二年間、あなたの足音に耳を澄ませていたの。なのに、あなたは一言の挨拶もなしで、また私たちをただ捨てていくというの？なぜなの、あなたは留まるべきよ。当然じゃない、テッド。今だってあなたのためにかまどではガチョウが焼けているし、マデイラワインはあなた用、食卓は夕食のために整えられているし、それだって全部、あなたのためのものなのよ。あなたの人生に口出したいなんて少しも思わなかったし、わかっているでしょうけど、これからも決して口出ししないわ。でも私は老い先短いおばあちゃんだから、もう一度、近くに私が愛する人たちに居てほしいだけなのよ」。

テッドは戸口のところに立って、決めかねているようでした。彼は去りたくもあり、残りたくもあったのです。つまらない激情が彼をどこかへ追い払おうとしていたのです。

「ねえユーラリー」と私は呼びかけました。「もしあなたが私と一緒に彼に留まるよう頼んでくれるなら、そしたら彼はたぶん思いとどまるわ。でももし…」、私はそれ以上、いうことができませんでした。皆がユーラリーの方を、彼女がどんなことをいうつもりなのか聞くために振り向くと、彼女は幽霊と同じくらいに青ざめ、黙ってその場に立ち尽くしておりました。しかしユーラリーはしゃべろうとはせず、テッドは再び出ていこうと踵を返したのでございます。

さあ、堪忍袋の緒をすっかり切ってしまわねばならないと私は思いました。私は走り出して、まだ彼に対していわねばならぬことがございましたので、彼を引き留めるために外套を掴みました。そうしましたら、外套がスルリと彼の肩を滑り落ちました。そしてその時、私たちは奇妙なことに気付いたのでございます。なんと、かわいそうなテッドは腕を失っていたのです。上着の右袖は空っぽで、胸の前で筋向いにピン留めされておりました。

「ああ」と私は声を上げました。「そうなのね？片腕をなくして、それでも私たちといられないというの？ええいいわ、テッド坊ちゃん。このばかばかしい小芝居はもうやめましょ。あなたは今、私の家に来ているのよ。」私は両肩を掴むと、店を通り抜けて彼を後押しし、肘掛椅子に彼を座らせました。

「さぁお夕飯の準備ができるまで、そこで待ってなさい」と私は申しました。「ユーラリー、あなたはここにて、私がお店を閉めてくる間、火の番をしておいて。それから気持ちの整理もね。ジョン、この壺をもって、垣根越しにタルボットさんに二ペンス分の乳脂を私たちにくれるよう頼んで頂戴。」

私が台所に戻ると、とても嬉しい光景が目飛び込んでまいりました。ユーラリーとテッドが仲睦まじい恋人同士と同じくらい愛情に溢れた様子で、一緒にベンチに腰掛けていたのです。それについてはこれ以上、何も申し上げる必要はございませんでしょう。だって、約二か月後には二人は結婚するのですもの。でも、ジョンが乳脂をもって戻ってきた時に彼がとったわざとらしい素振りについては、申し上げなければなりません。何をするにせよ、彼はテッドの変装に騙され続けていたふりをしないではいられないのです！

「本当にテッドなのか？ずっとどこかの老人だと思っていたよ！いやぁ我が運命に感謝を！」彼はそういうと、自分の足をピシャリと叩き、他の方がなさるように自分で自分の冗談にうけて、すぐにクスクスと含み笑いを始めました。「なんてこった、テッド。君は私たち皆を化かしてみせたんだ。君の母親だって君とは見抜けなかっただろうよ。今までの人生で、こんなに驚いたことはない。さぁ君がどうして自分の腕をなくしてしまったのか、全部話してくれ。もし気が動転しているなら、どうしてそうなったのか、私は君に話すよう尋ねたりはしないさ。なぜって私もちょくちょく気が動転するし、どうしてそうなるのかも分かってるからね。でも未だに私はどちらの腕も何とか失わずにすんでいるよ。」

ところで、ジョン・ラヴェンダーが気を動転させた事件についての面白いお話もございますので、ひょっとするとまた別の機会にお話しさせていただくかもしれませんわ。

(T・S・クラーク)

「アン・ラヴェンダーの回想（続）」

彼がしばしの間休みしときは、
遊ぶため、勝負に興じるため、体を動かすためのもの、
彼はいう、我は自分自身を試すのだと、
かなりの大胆な気質によりて
「湖のラーンスロットの詩」より

はしがき

下ウェスタービー郵便局についての報告を検討するのは、苦痛というよりも、むしろ常に喜びであった。二、三時間の骨の折れる時間を過ごした後か、印紙や新聞紙の帯封を数え、郵便為替の受領証を確かめ、運搬費についての苦情を確認するなどしている最中に、申し開きをさ

せなければならないようなイライラする収支の過不足がほとんどの郵便局で起こることを、諸賢はご存じであろう。偶然でも後者〔不足、赤字〕が起こると、郵便局長が「現金不足」を補填するための巧妙な借入金取引を企てないよう、彼に用心深い視線を送りつつ、諸賢は間違っ
て置かれた絵葉書の包み袋か、内国歳入庁の伝票の古い束を探して、部屋の角においてあるゴミ箱の中をひっかきまわして探さねばならなくなるのである。この種のことは下ウェスタービーではかつて起こったことがなかった。なぜなら、ラヴェンダー夫人は几帳面な性格の持ち主のひとりで、そういった人たちは、一般的な郵便局長なら不当に非難されて気分を害したといった様子で無視を決め込むような、わずかな違いについても、さも狂気の縁にいるかのように心配するからである。その結果、下ウェスタービーでの私の仕事は常に時間通りに処理され、コーチ〔長距離バス〕の出発時刻を待つ間、気晴らしに女局長〔アン〕とのしばしのお喋りを楽しむことができたのである。そういえば、ある時、ドノヴァンという名の若者について話を聞いたことがあった。彼は以前、下ウェスタービーで電報配達夫をしていた人物で、電信技師の資格取得後、より条件のよい就職先を求めてその業務からちょうど離職したところだった。この向こうみずな若者はラヴェンダー夫人の大のお気に入り、彼女が私に彼の話をしてくれたのだった。取り急ぎ、私は私の読者諸賢に断言しよう。この話は、「人の性分は世界中どこでも大して変わらない」という古い諺を証明しているという点以外、何ら特定の道德観を示すものではない。

ラヴェンダー夫人の話

ジャック・ドノヴァンが電報配達夫として勤め始めたとき、私は彼を全く申し分ない少年だと思いました。彼は賢いだけでなく、真面目でした。ほとんどの少年たちは仕事に精を出すべきときでも、いつもお互いにふざけ合ったり、人のうちのベルを鳴らして逃げたり、勝手口で叫んだり、ビー玉で遊んだり、独楽をまわしたりしているものでございます。ジャックは普段から控えめで、他の少年たちとゲームをして遊ぶよりも、むしろ独りでよく本を読んでおりました。不幸なことに、彼が読んでいた本の類は何の役にも立たないと思われるものでございました。昨今、少年向けに売られている廉価な三文小説の類をご存じでしょう。そういった小説は海賊やカウボーイ、野蛮なインディアン〔ネイティブアメリカン〕、遍歴騎士のお話で、少年はそういうものを全く本当のことだと信じております。ジャックはしきりにその種のクズ本を読んでおりました。彼はよく働いておりましたので、当初は大した問題にはなりませんでした。が、くだらないお話の主人公の真似が好きになると、困ったことになり始めました。例えば、彼は以前、チュニクの胴回りに巻き付ける長いロープを手に入れたり、ベルトに差し挟んだもの〔後述の拳銃やナイフ〕で彼のチュニクを膨らませたりしておりました。そのあと、私は配達遅延の苦情を受け取るようになり、報告書の提出を求めて次官執務室の方から私に書類が参りましたので、それを私は問題を詳しく調べるべき時がきたのだと思いました。そしてあ

る日、電報を配達させるためにその少年を送り出してから、私は夫のジョン・ラヴェンダーに彼をつけて、何をしているか調べてくれるように頼みました。ジョンは20分ほどで息を切らして戻ってまいりまして、道に出てみれば私自身で何が起きているかみることができるよ、と申したのです。

さあ信じられますでしょうか？タンブリン通りの新しい壁枠をちょうど越えたところにあったトムリンソン博士がお持ちの牧草地で、私どもはジャックがそこに放牧されている年老いた灰色の馬を乗り回しているのをみつけたのです。彼は行商人のように大声をあげ、輪にしたロープを頭上で振っておりまして。この輪っかを彼は投げ縄のように、トムリンソン博士の牛の角に投げかけようと頑張っておりまして。二度のほどの失敗のあと、彼は牛の首に輪縄を届かせ、ロープが締まるように引っ張りました。ロープが締まると、もう一方の端を自身の胴に括り付けたその分別のない少年は、いうまでもなく牛を馬の背にグイッと引っ張りあげようとしたしました。すると牛は驚いて、後ろにジャックを引きずったまま、野原を駆け回り始めました。夫が何とかロープを掴んで牛を自由にすると、私たちはその少年が怪我の痛みよりもショックで茫然となっているのに気付きました。しかし彼がチュニックの下ベルトに挟んだ一挺の拳銃と二振りの長刃ナイフを持っているのをみつけたので、私どもはおかげで彼が死なずに済んで素晴らしいことだと思ったのでございます。骨は折れてはおりませんでしたけれど、私が彼を自宅に送り届け、ジョンが電報を自身で配達せねばならなかったほど、彼はとても傷つき動揺しておりました。

もちろんこれは深刻な違反行為でしたし、私はその少年をどう罰するべきか考えねばなりませんでした。ちょうどその頃、私には彼を停職にしたいくない特別の理由がございました。ご存知でしょうが、ジャックの父親は当時、私どもの夜間郵便を運ぶ郵便馬車の運転手をしておりましたが、不幸なことに父親には悪い酒癖がございました。覚えておいでかもしれませんが、ついには彼の仕事は無しにされてしまいました。あの人が希望を失い酩酊した日には、もしジャックが自発的に馬具をつけ、郵便局に馬を連れてきて、ミルバラまで無事にそれを運転しなかったなら、夜間郵便は永遠に届かなかったことでしょう。私は彼が18歳になっていないことを存じておりましたが、緊急の際はそのような些細なことには潔癖でない方が宜しいのでございます。

牛の事件が起こったその日、私は夜間郵便をとっても心配しておりました。それは書留付の手紙や小包が大量にあったからで、それ以外にも本局にたくさんの額の送金をしようとしていたからでございます。近隣には夜盗が何組か出ておりましてし、郵便局の近辺をうろつく怪しい人間をみてもおりました。夜間郵便はいつも私にとって心配の種でございました。気を配る人間一人だけが乗った荷馬車で非常に多くの貴重品を配送するというのは、十分に厄介なこと、もしその者が当てにならず、半分酩酊状態なのでしたら、何が起こらないとも限りませんでした。

さあまさにその夜のことでございます。郵便を発送する時刻になりますと、御者台に座るジャック・ドノヴァンを乗せて、馬車が戸口までやって参りました。ジャックが面目を失っており、また未成年であるという事実を念頭に、私は彼に御者をさせるべきではないのではないかと思いますので、職務を請け負うに相応しい代わりの人物をみつけれないか探しに行ってくれるよう、夫にお願いしました。彼が行っている間に、私は馬車に郵袋を載せ、そして書留郵便を取り出したばかりの金庫に鍵をかけるため、私の寝室へ階段をあがりました。この時まで、ジャックは馬の頭を抑えておりました。それが夜の7時半ぐらいのことで、まだ外は明るかったのですが、黄昏が近付いてきており、馬車がミルバラに到着する前に暗くなるだろうということを、私は存じておりました。

私が金庫の鍵を回したちょうどその時、店の方でガサゴソいう音が聞こえると、続いて階段を上がる重い長靴のバタバタという音がいたしました。そして扉が押し開けられ、男性が頭を差し込んできたのです。そこに立つ私をみると、彼は頭をひっこめ、扉を閉めると、外から扉に鍵をかけたのでございます。私は驚いて窓に駆け寄りました。郵便馬車がどうなっているかみておくために、その時、窓は開けてあったのでございます。みるとジャックが、背後から押し掛かるように彼に巻き付く、大きなアゴ髭男の腕に必死で抗っており、その一方では他の、小柄な男が馬車によじ登ろうとしておりました。この最後の男が、店の中にまだいた三人目の男に急いで金目のものを運び出すよう声をかけました。それで私は、店の中にいる男が引き出しや食器棚を開け、下の階を隈なく探し回っている音をきくことができました。しかしクラーク様、続いて起こったことは、それをあなた様に信じていただくためにはどう説明いたしたらよいのか、私には判断がつかぬほど、意外なことだったのでございます。とは申しまして、最善を尽くしてみることにいたしましょう。

先ほど申しました通り、私は開いていた窓際に駆け寄ったのでございますが、最初、何をしてもよいやらわからぬほど放心状態でございました。それでも声が出るようになりますと、助けを求めて、できるだけ大きな声で叫び始めました。その叫び声がジャックを羽交い絞めにしていた男の注意を引いたのです。彼は私に激しく悪態をつき、店の中にいた男に、階上に上がって私を黙らせるよう呼びかけました。私がまだ叫び続けておりましたので、その男は焦れてきて、自分で私に対応するためにジャックを放しました。しかし彼が解放するや否や、ジャックは山猫のように彼にとびかかり、あれよという間に男は舗道に仰向けになっておりました。さて先ほど申しましたように、この男はでっぴりとした大男で、おそらくは14ストーン〔体重測定用に用いられた重量単位。1ストーン＝14ポンド（約6.35キログラム）。14ストーンは約89キログラム〕もあったのではございませんでしょうか。さらにお話を先に進める前に私が申し上げておかねばならないのは、ジャックが彼自身よりもよっぽど力の強い輩を伸すことができたのはどうしてだったのか、ということでございます。彼はそれを、彼が好きな少年向け雑誌の一冊から学んだレスリングの技を使って成し遂げたのでございます。ご想像ください。

大男と真正面で対峙して、左手を男の左肩にかけると同時に、彼を軽く押すように鋭く顎の下に左肘を上げるのです。これで少しの時間、彼の防御の姿勢が崩れますので、その間に右手と一緒に右足、どちらかといえば右膝でしょうか、そうやって彼を掴まえ、左腕で彼の首を押したまま右手を上を持っていくのです。それですべてが一瞬にして決します。以上が、ジャックが説明した技の内容だったのでございます。彼が申しますには、それで意気軒昂な大男を叩きのめすことができたとのことでした。大男は後頭部を舗道に打ち付け、大きな音を立てて倒れ込むと、そのまま気絶してしまいました。

男が倒れるや否や、ジャックはチュニックの下ベルトから拳銃をさっと取り出し、それを郵便馬車の男に示しました。その輩は仲間を助けるために、ちょうど御者台から降りてきたところでございました。

「手を上げろ、さもないと撃つぞ!」と、ジャックが叫びました。

男は手をあげ、御者席まで後ずさりいたしました。その慌てぶりは、御者席に躓いて、吹き抜けて落ちこたへたほどでございました。ジャックはすぐさま馬車に飛び乗ると、その吹き抜ける蓋をガチャンと閉め、まるで仕掛け罠にはまったネズミのように、郵袋ごとその小男を車内に閉じ込めてしまいました。次にジャックは蓋の上に座り、馬を動かそうといたしました。ムチを持っておらず手綱も彼の手が届くところになかったので、できませんでした。彼が馬に呼びかける間に、三番目の男が引き出しや食器棚から盗み出したもので一杯になった袋をもって、事務所の外に駆け出してまいりました。その瞬間、ジャックは拳銃を馬に投げ当てることで、馬を走りださせることに成功いたしました。馬車はその輩が馬車に追いつくのがさして難しくないような、歩くペースより早くはない、とてもゆっくりしたペースで道を進んでいきました。そしてまさにその時、ジャック最高のお手柄がやってまいりました。男が馬の鼻先によりやく辿り着き手綱を掴むのと同時に、二人の男性を連れたジョン・ラヴェンダーを除いて、誰が角を回ってその前方にやってきたというのでしょうか。盗賊は彼らを目にとらえると、一瞬、躊躇をみせましたが、その次の瞬間には踵を返して駆け戻り始めたではございませんか。するとその直後に私どもが目にしたのは、ジャックが頭の上で、牛のときに彼を苦境のようなものに陥らせたロープを振り回す姿でございました。彼は勇ましい雄叫びを上げると（彼曰く聞の声だそうです）、盗賊に狙いを定めてロープを投擲いたしました。輪縄は逃げようとする盗賊めがけて落下し、盗賊の膝を捕えました。今度こそジャックは、自分の体にロープのもう一端を括り付けるほど愚かではございませんでした。それは馬車にしっかりと結び付けられておりましたので、それがピンと張ったとき、男が足からグイッと引っ張られ、馬車の後ろで屈辱的に引きずられていったことは、私がご説明するまでもございません。盗賊たちは皆、強盗未遂のためにミルバラの巡回裁判で審問を受け、有罪となったのでございます。

ラヴェンダー夫人は幾分、唐突に話を打ち切った。それは彼女が語っている間に、彼女の夫

が入ってきたからであった。「面白い話だね。」そう彼はいった。「電報配達夫なら誰もが大人の男三人を手早く叩きのめす偶然に巡り合えるというわけじゃないし、もしその機会があったとしても、そんなことをできる人はなおさら少ないんじゃないかな。僕らの囚人を捕まえたとき、ジャックの顔が得意げだったのをみたらう。あのあとで僕は彼に、楽しかったかどうか尋ねたのさ。そしたら彼は、馬車に結びつけられたヘクトールの体を引きずるアキレスみたいな気分だったといていたよ。」

「そのジャックのレスリング技には知るだけの価値がありますね」と私は考えを述べた。

「その通り、とても効果的でね。とはいえ、僕が驚いたのは男が死ななかったことだよ。もう一人も死ななかった。投げ輪で捕まった男のことだけど。僕はジャックにいったんだ。君は自分の振る舞いに注意しなければならない、さもないと近いうちに、君は誰かを殺してしまうかもしれないってさ。そしたら彼は何て答えたと思う？ちょっと待ってね。僕はそれを自分のノートに書き留めておいたんだ。」

ラヴェンダー氏はノートを取り出すと、以下のように読み上げた。

「泥棒しようとした馬車の後ろで、足枷されたままで引きずられることよりも恐ろしく、同時に卑怯者にこそふさわしいのは、どんな死に方なのかなあ？」

* * * * *

「さて」とラヴェンダー夫人はいうと、「残りの部分をお話いたしましょう」と続けた。「申し上げるまでもなく、事の顛末は裁判で明らかとなりまして、各新聞で報道されました。その話題はこの地域とミルバラの両方にかかなりの興奮を引き起こし、ジャックに贈呈品と一緒に贈るため、基金が立ち上げられることになったのでございます。ジャックには秘密でしたが、その贈呈式はある土曜の午後、サラセン人の頭〔宿屋の看板。宿屋の意〕にある集会室で開催されるよう手配されました。時間が来ると、私どもはジャックを呼びまして、ジョン（彼は子供みたいな冗談をいうつもりなのでしょう）がジャックに、わざと電報の到着を遅らせた行為が慎重に検討され、それで彼がミルバラ市長の前に出頭させられることになったのだと告げました。そうやっておいて、私たちは一緒にサラセン人の頭に参りました。部屋はすし詰め状態になりました。私どもが部屋に入ると大歓声上がり、続いて市長様が演説を行われました。市長様は今回の出来事の仔細を最初から最後まで物語り、ジャックの勇敢さや行動、忠誠心、業務に対する献身について、口を極めて彼を褒め称えてくださったうえに、その方々がジャックに称賛と高い評価を向けていることの証拠の一端として、ドノヴァン少年に進呈する目的で、かなり高額な基金が設立されたことを発表なさいました。贈呈品は立派な郵便護送人の時計と財布の形をしておりました。次に、市長様はジャック・ドノヴァンに進み出るよう呼びかけて下さり、好ましい大喝采の中、可哀想にジャックは、郵便局の郵便ポストと同じくらい顔を真

っ赤にして、恥ずかしそうにしながら、部屋の中央に贈呈品を受け取るために進み出ました。断言してもよろしいのですが、私は笑うのと泣くのを一辺にしているような気分になりました。その後、ジャックの父親が面倒事を起こし、若者をよりよい状態に置くことが重要になりますと、ジャックには近隣の人々から幾つもの雇用の申し出が参りまして、先に申しましたように、彼は今、サー・ジェームズ・ハートリー様のところで猟場番人の助手をしていますの。」

(T・S・クラーク)

(みずた ともりの 歴史学科)

2017年11月15日受理